

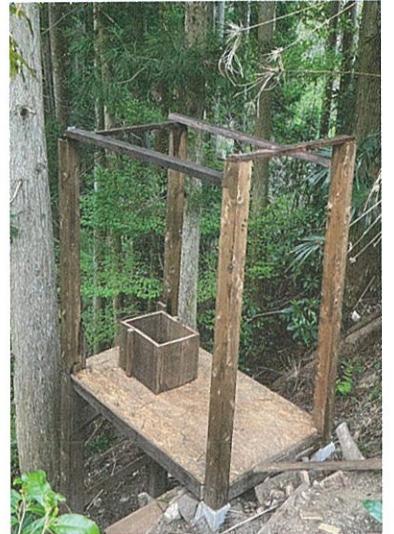
四月の活動内容

四月に入り待ちに待つ春が到来しました。自身の活動としましては、先月に引き続き天龍村の歴史書籍の制作に向けた原稿の作成を行いました。

常民と山民

日本民俗学の創始者である、柳田国男は「常民」と「山民」の生活をわけて考えました。常民とは稻作に向いている平地で暮らす人々のことです。山民とは稻作に向いていない山間部で暮らす人々のことです。平地と山間部では地形が異なり、地形が違えば自然環境も異なります。自然環境によつて人間の生活が基本的に形づくられる考え方れば、平地と山間部で生活が違うのは当然のように思えます。

天龍村の古代の人々がどのように暮らしていったのか疑問に思いました。繩文時代であれば狩猟・採集・漁労で豊かな森林資源と河川を活用して暮らしていたと想像できま



近づいており、慌ただしくなっています。開花が早かつたの同様に茶摘みの開始予らとなっています。四月から摘むのはから思います。バイオトイレはまだ製作中で周りの竹や木の伐採は順調に進んでいます。抹茶を作つてみようと思い、抹茶の原料復を一部しています。

度を導入しオーナーの募集を開始しました。申し込みいただいています。思つた以上が今後増やしていくか、申し込みいただいた方々が次年度以降も継続していただけれるように出来るかが重要だと思います。オーナー様に満足いただけるような対応・サービスをしていきたいと思います。



しかし、弥生時代になると稻作文化が波及してきますが、天龍村は山間部であるため大規模に稻作を行うことはできません。稻作を行うためには開けた土地と水を引っぱるための灌漑が必要になります。古代に灌漑の技術があつたのかもしれません。しかし、現代のように先達していたとは考えられず、稻作を行う土地は限られていたかもしれません。

そこが常民と山民の分かれ目で、稻作に適した平地で暮らした者が常民となり、山間部で暮らした者が山民になりました。山民は依然として縄文時代の生活を継続し、主として狩猟や焼畑でアワやソバを

栽培して暮らしていました。少し開けたところをみつけて稻作を行つて、いたとも考えられます。平地で稻作を生業にすれば定住性が高まりますが、山間部での狩猟や焼畑は食料資源を求めて各地を移動するので移動性が高くなります。おそらく古代において天龍村は各地から山民が出たり入ったりを繰り返していた土地だったのではないか。
木材を切り倒す生業をもつた「杣氏」や、木材を加工して曲げ物を作製した「木地師」さらには木材を焼いて炭に加工する「炭焼き」に関する史料は中世以降から出てきますが、古代においても木材が活用されていたことは確かなことです。塩をつくるには加熱が必要で、その時に木材が必ず使われます。森林と水があるところは人が暮らすことはできますが、集落がありますが別問題です。集

天龍村の鉱山

「神豊太陽鉱山」といわれるタングステンと銅の産出地帯が天龍村見遠と阿南町新野の境界付近にあつたといわれています。太平洋戦争中は断定であります。太平洋戦争中の採掘作業が行わされましたかは断定できません。しかし、平安時代の後期の人物として「鎌倉権五郎景政」がいます。じて今の遠山地方を所領にもつていました、「遠山氏」の祖先であつたとする伝承があります。

あれ、もしかしたら
天龍村の鉱床から
銅を採掘していった
とも考えられます
「神豊太陽鉱
山」に関する史料
がかなりませんが、
古代の天龍村にお
いても銅が採掘さ
れ、製銅に「炭」
が使われています。
しかし、いかと思
うと、細かい
ところはわから
いません。しかも
まだに詳細はわ
かりません。
どうしたか情報を
お持ちの方がおり
ましたら教えてい
ただければ嬉しい
です。

いざれにせよ天
龍村は古代におい
て山林資源を活用
して生業をした
「山民」が暮らし
ていた土地であつ

民告官

四月になり、いよいよ協力隊三年目に突入しました。協力隊員としての最後の一年、相も変わらず村の皆さんのお力を借りますが、できる限りのことを精一杯頑張って参りますので、よろしくお願いいたします。

やまびこデリ

今年度より3人体制に復活し、パワーアップして村内を回りますので、よろしくお願ひいたします！

また、天龍小・中学校の生徒の皆さんにデザインを考えてもらった移動販売車もデビューに向けて準備を進めていますので、移動販売の開始まで今しばらくお待ちください。





文前川 未来

【天龍村をきれいにする作戦！】として加藤・望月・松川隊員とともに、おうちに眠っている不要な食器類を回収しました。

ありがたいことに予想を大きく上回る数のご連絡をいただき、直接回収に伺つたり持ち込んでいたりし、たくさんの中の食器が集まりました。こうして一か所に集まつてみるといろいろな種類の食器があり、並べる作業だけでも、お宝発掘！といった感じでワクワクしました。提供してくださった方のご了承を得たうえで、集まつた食器たちは『蚤の市』にて村内外の方々に見てもらい、お気に入りをお持ち帰りいただきました。訪れた方々が並んだ食器を手に取つて宝探しをしている様子が、楽しそうでとても印象的でした。

今回の『蚤の市』では並べきれなかつたお宝たちが実はまだまだたくさんあるので、今後どうにか皆さんに見てもらえる機会を作ることができたらいいなと考えています。

